



宿題への問い

校長室に来る子供から「なぜ宿題をしなくてはいけないの?」という問いがありました。宿題と言えは私も子供の頃は、野山を駆け回っていたので、ついつい忘れて、翌日先生にばれて大目玉をくらっていました。この問いに対しての解は、永遠の課題の様な気もしますが、宿題の究極の目的は、「『できる』自分との出会い」と考えます。そもそも宿題とは、学びをより深めるための鍵となります。知識を定着させたり、自己成長を促したりする重要な役割があるからです。



知識定着のために、反復学習を通じて、脳に深く刻まれ、長期的な記憶として残りやすくなります。特に新しい知識は何度も使って、やっと身に付くという事が殆どです。宿題は「慣れる」「覚える」「使ってみる」という形も多く、これはゲームでも、スポーツでも、デジタル機器でも何でも同じです。覚えた知識を「覚えた」というぼんやりとしたものではなく、何回も練習をしてみて、初めて「使えるようになった。」と実感を伴ったものとなります。

また、自己成長を促すために、宿題を通じて、子供たちは自分自身の強みを見つけるチャンスを得ます。得意な分野で自信を感じたり、苦手な分野を見つけ、それを克服したりして、成長する一歩となります。これは、自分を知るきっかけとなるのです。さらに、宿題を習慣化することで、面倒なことを頑張ってやり遂げる力が育ちます。これは、将来の自己成長や成功に向けての大きな一歩となると言えるでしょう。

教員になって、宿題を出す立場からすると、宿題とは、決して制裁などではなく、逆に「思いやり」に近いものでした。子供たちの実態を考えて、宿題を印刷し、それらをチェックするために、残業したり、家に持ち帰ったりして、子供たちの理解度や定着度を測っていました。そんな中で宿題を忘れた子供には、きちんと「こういう理由で宿題をしていません。だから、いつまでには提出します。」「今回はここだけはします。」などと自分の口できちんと説明するように伝えていました。こうして、社会性も身に付いていくのです。やらなくていいなら、やりたくない宿題ですが、続けることで「できる」自分に出合えるようになります。そのような経験があるので、今は仕事上の「宿題」がたくさんあっても「あと少しやってみよう。」と自分を励ますことができるのです。

消費期限と賞味期限

頭を使って仕事をしていると、時々甘いお菓子とコーヒーを体が欲しくなります。頂き物のお菓子には、「賞味期限」というシールが貼ってあります。このように、お店で買った食品には「消費期限」と「賞味期限」のどちらかが貼ってあります。まず「消費期限」ですが、これは袋や容器を開けないまま正しく保存した場合「この日までは安全に食べられる期限」を表します。主に、日持ちしない。傷みやすい食品に表示されています。一方「賞味期限」ですが、これは袋や容器を開けないまま書かれた保存方法を守っていた場合「この日までは品質が変わらず美味しく食べられる期限」を表します。だから、表示期限を過ぎても、食べることができるのです。主に、常温で保存できる、傷みにくい食品に表示されています。



消費期限と賞味期限を知って、食と上手に向き合いましょう。